

第2学年A組 道徳科 授業者 田中 千映
単元名「じぶんもまわりの人も気持ちよく」教材名「きまりのない学校」

1. 目的・ねらい

ともによりよく生きるためには、自分の思いのままに行動するのではなく、自分はどうすればよいのかを考えて行動することが必要になってくる。本単元では、周りの人とよりよい人間関係を形成しながら、ともに気持ちよく生活を送ろうとする道徳的実践意欲や態度を育むことを目的とする。

【ねらい】

約束やきまりがあることや、それらを守ることの意義について考えることを通して、周りの人とよりよい人間関係を形成しながら、ともに気持ちよく生活を送ろうとする道徳的実践意欲や態度を育む。

2. 教科の本質と教材について

道徳科の本質は、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことである。つまり、ともによりよく生きるために主体的な判断や適切な行為を選択できるように、授業の中でいろいろな見方・感じ方・考え方を養うことが大切であると考えている。また、道徳科は、様々な教育活動における道徳教育の「要」として、補充、深化、統合させる役割をもつ。

この時期の子供たちは、まだ自己中心性が強く、視点を自分から周りへと広げて物事を考える側面は弱い。自分の楽しさや興味に夢中になるあまり、周りの人に迷惑をかけてしまうこともある。本学級の子供たちも同様に、様々な学習や活動に夢中になり、周りの人に対して迷惑になる行動をしてしまうことがよくある。また、仲間をつくり、よりよい人間関係を形成する上では、自分の思いのままに行動するのではなく、自分はどうすればよいのかを考えて行動することが必要になってくる。

本単元の道徳科の2つの教材では、生活科、体育科、学校行事、日常生活（主に規則の尊重）の指導と関連させながら、身近な約束やきまりは周りの人と気持ちよく安心して過ごすためにあることを理解し、それらを守ることの意義について考えることを通して、周りの人とよりよい人間関係を形成しながら、ともに気持ちよく生活を送ろうとする道徳的実践意欲や態度を育みたい。

3. 子供の実態と単元末に期待する本質を味わった子供の姿

通学途中や学校生活の中できまりを守って行動しなければいけないことは多い。しかし、上記でも述べたが、子供たちは自分の楽しさや興味に夢中になるあまり、きまりを守らず活動してしまうことも多い。守らないと叱られるから、守るとほめてもらえるからという気持ちからきまりを守ろうとする子供も少なくない。子供たちは、他律性から自律性に向かうちょうど過渡期でもある。そのため、道徳科の学習から、きまりや約束は「叱られるから」「ほめられるから」守るのではなく、「周りの人と気持ちよく生活できることにつながるから守りたい」という思いをもつことができるようになった子供の姿を期待する。また、自分の行動は周りの人も気持ちよく過ごすことができているかを振り返ったり、周りの人と気持ちよく生活を送るためにはどのように行動したらよいかを考えたりしようとする子供たちの姿も期待したい。

A児…「きまりを守って行動しないと周りの人に迷惑をかけてしまう」ということはわかっているように思うが、友達に流されてきまりを守らず行動してしまったり、まだまだ「叱られるから」「ほめられるから」の基準できまりを守ったりする様子が見られる。単元末には、「叱られるから」「ほめてもらえるから」が基準ではなく、「みんなが気持ちよく過ごすために守ろう」という思いで行動しようとする姿が増えていくことを期待する。

B児…自分の楽しさや興味に夢中になりやすく、自分の思いのまま行動してしまうことが多い。単元末には、自分の思いのままに行動してしまいそうときには、「これって、みんなに迷惑が掛かっていないかな」と、自分の行動に自分でストップをかけられるような姿が少しずつ見られるようになることを期待する。

4. 本単元における教科の本質を味わうためのしかけ

しかけ① 内容項目「C 規則の尊重」の教材とそれに関わる他教科・他領域の単元で構成する

事前には、生活科「おもちゃランドをひらこう！」や体育科「体づくりの運動遊び」を設定し、「規則の尊重」に関わる経験や体験を意識して取り入れるとともに、日常生活の中で「規則の尊重」に関わる子供たちのプラス面の行動を価値付ける声かけをしていく。それらの経験や体験は、道徳科「おじさんからの手紙」「きまりのない学校」において、自分との関わりで考えることの土台となる。事後には、生活科「めざせ、バスはかせ！」や学校行事「秋の校外学習」を設定している。道徳科で養われた道徳性を実践することができ、実感を伴ったものへとつながると考える。また道徳科の2つの教材は、同じ内容項目（C規則の尊重）を連続して扱う。連続して扱うことで、公共の場においても、学校生活

においてもきまりのもつ意義やきまりを守って過ごす必要性は同じであることもつなげて考えることができることを期待している。

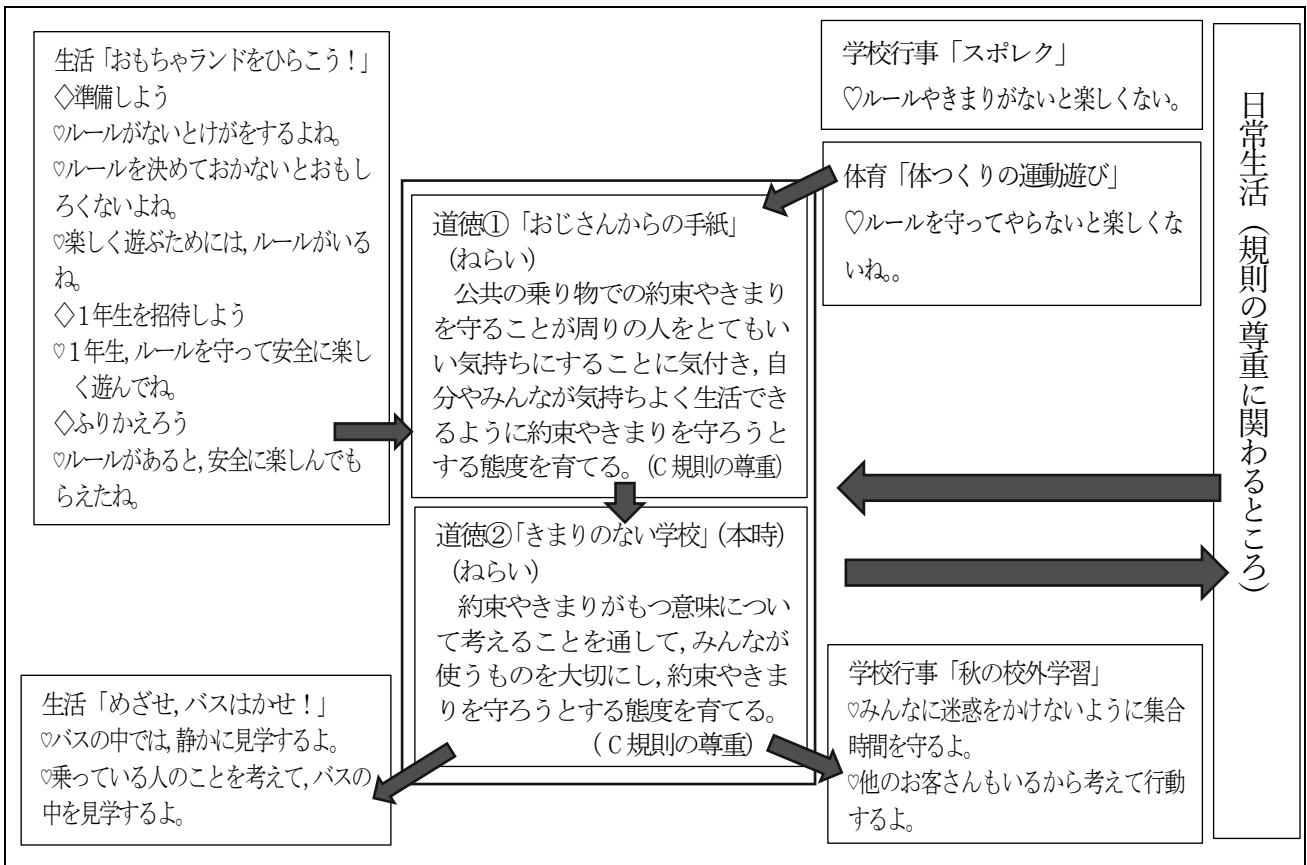
しかけ② 事象や出来事を比較しながら話し合える発問を構成する

道徳科の1時間で、いろいろな見方・感じ方・考え方を養うためには多面的・多角的に考えることが大事であると考える。そこで、事象や出来事を比較できる発問を行い、様々な視点からの考えを比べながら、話し合えるようにする。「おじさんからの手紙」では、「嫌だなと思った時」と「愉快に思った時」を、その時の様子（状況）、おじさんの立場、子供たちの立場で比較できるようにしながら考えられるようにする。「きまりのない学校」（本時）においても、「きまりがある時」と「きまりがない時」を、その時の様子（状況）とその時の気持ちで比較しながら考えることができるようにする。比較をしながら考えることで、きまりの意義やきまりを守る必要性を見付けることができることを期待する。

しかけ③ 振り返りの視点を設ける

振り返りでは、「新しくわかったことや考えたこと」「同じような自分の経験（プラス面で）」「これからの自分の生活に生かしたいこと」の3つの視点を設けて書くことができるようにする。「同じような自分の経験（プラス面で）」「これからの自分の生活に生かしたいこと」を取り入れることで、自己を見つめ直したり、自己の生き方につなげたりしようとする子供の姿を期待する。また、同じような自分の経験（プラス面）が思い起こせるように、事前の体験や経験を充実させるようにしておく。

5. 学習の流れ（ 道徳科 全2時間 ）



6. 本時のねらい

約束やきまりがもつ意味について考えることを通して、みんなが使うものを大切にし、約束やきまりを守ろうとする態度を育てる。（C 規則の尊重）

引き出した子供の言葉

- ・きまりって、みんなが安全に気持ちよく過ごすためにあるんだね。
- ・きまりを守って過ごす自分も周りの人も気持ちよく過ごすことができるね。
- ・自由にできる方が嬉しいけれど、やっぱりきまりを守らないとみんなが困るから頑張って守りたいな。

7. リフレクション

7. 1. 本実践と生徒エージェンシーの発揮を可能にするための3つの要素のとの関わり

本単元では、生徒エージェンシーの発揮を可能にするための3つの要素のうち、「③しっかりと基礎力をつけること」に重点を置くと共に、「①子供たち一人一人が自分の情熱を燃やし、別々の学習経験や機会をつなげて考えるようになること」も大事にしなが、単元を構想した。

「③しっかりと基礎力をつけること」とは、本単元では、道徳科の授業における「ねらい」にせまることができるようにすることであると考えている。「ねらい」にせまることができれば、ともによりよく生きるために主体的な判断や適切な行為を選択できる見方・考え方・感じ方が養われ、生徒エージェンシーの発揮を可能にすることができる。そのためのしかけとして、「事象や出来事を比較しながら話し合える発問を構成」を取り入れた。道徳科「おじさんからの手紙」では、「嫌だなと思った時」と「愉快地に思った時」を、その時の様子（状況）、おじさんの立場、子供たちの立場で比較できるようにした発問を行った。また「きまりのない学校」でも、「きまりがある時」と「きまりがない時」を、その時の様子（状況）やその時の気持ちを比較しながら考えることができるように発問を行った。

また、「①子供たち一人一人が自分の情熱を燃やし、別々の学習経験や機会をつなげて考えるようになること」も大事にした。それは、道徳科の授業において、関連ある経験や体験が、自分との関わりで考える土台となったり、自己の生き方につなげたりしようとするにつながつたりするからである。そのためのしかけとして、「内容項目（C 規則の尊重）の教材とそれに関わる他教科・他領域の単元で構成する」「振り返りの視点を設ける」の2つのしかけを取り入れた。

以下では、これらのしかけが生徒エージェンシーの発揮につなげることができたかについて、抽出児を中心とした子供の学びの姿から述べる。

7. 2. 子供の学び

7. 2. 1. 道徳科における子供の学び

道徳科①「おじさんからの手紙」

教材から、おじさんが「嫌だなと思った時」と「愉快地に思った時」を、その時の様子（状況）、おじさんの立場、子供たちの立場になって気持ちを考え、板書にも比較できるように表した。また板書から、子供たちは、「他の人がにこにこで乗っていたら、自分たちも嬉しくなるからいい気持ち」「がまんするのはしんどいけれど、やっぱりみんなが嬉しそうだった方がいい」と考えた。また、2つの場面の違いを通して「嫌だなと思った時は、自分たちだけが楽しんでいるけれど、愉快地に思っている時は、みんなが楽しんでいる」と考えた。

<授業の振り返り>

A児ぼくは、電車に乗っている時は自分がよかったらいいと思っていました。どうしてかという、自分には迷惑がからないからです。

B児ぼくはいつもバスの中で静かにしているけど、たまにうるさいかな？と思う時があるので気をつけたいです。

道徳科②「きまりのない学校」

教材から「きまりがない時はどんなことをしていた？どんなことが起きる？」「反対に、きまりがあった場合は、子供たちはどんなことをしていたと思う？」と、「きまりがある時」と「きまりがない時」の様子（状況）の違いを問う発問を行った。子供たちは、板書（図1）のように、「きまりがある時」と「きまりがない時」の良い面、悪い面について考えた。B児は、きまりがあるときの良い面として、「（ノートを破って紙飛行機にしなければ）落下物が少なくなる」と発言していた。

「きまりがある時」と「きまりがない時」の良い面、悪い面を考えた後は、夢から覚めた主人公が「夢だったんだ。ああ、よかった」と言った理由について考えた。「きまりがなかったらけがをしたりするし、友達のこと知らんふりやから、けがした子は自分で保健室に行かない」「ボールが当たったら嫌な気持ちになっちゃって、きまりがなかったらそんなことになるから」「自分が作ったものを壊されたから悲しい」「おもちゃを鬼ごっこで壊して謝ってもくれないけど、きまりがあったら謝るからいい気持ちになる」などの意見が出された。子供たちの発言を受けて、「でもきまりがあったら怒られるけどいいの？」と問いかえすと、「みんながけがをして休みになるよりいい」「きまりがなくて自由時間が増えるよりも、きまりがあって友達がけがをしないう方がいい」という発言が見られた。

「きまりがあるのは〇〇のため」と、〇〇に入る言葉を考えた時、A児は「みんなのため」と発言していた。

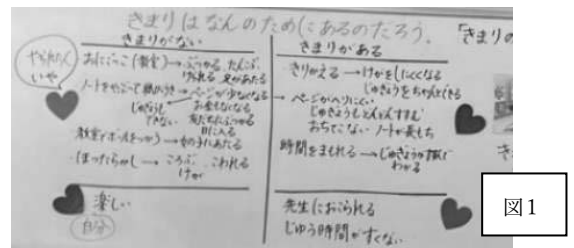


図1

<授業の振り返り>

A児 ぼくは、きまりはいらないと思っていました。どうしてかという、自分だけいいならなくてもいいと思っていました。でも、今日の勉強できまりがどれだけ必要かわかった気がしました。ぼくは、ドッジボールで外野の時、横から投げていると思っていたが、そんなきまりがあると知らなかったから、それもルールなんだとわかりました。

B児 ぼくは一度も、そんな経験はないけれど、やっぱりいやだなと思います。人を殴ってもおこられなかったダメだから、きまりはなかったらダメだと思います。

7. 2. 2. 道徳科の授業後における子供の姿（抽出児を中心に）

道徳科②「きまりのない学校」の授業後の日常生活の中で、子供たちの行動に変容が見られるようになった。

特に、B児は、行動に顕著な変容が見られた。B児は、これまで水筒置き場に置くように声掛けをしても机の横にかいたり、足元に置いたりしていた。しかし、授業を終えた次の朝からは、自分から水筒置き場に置くようになった。また、直し忘れていた時には、「みんなが引がかかるから水筒置き場においてきてね」と声をかけると、「忘れていた」というような様子ですぐに片付けに行く姿が見られた。他の持ち物も同様、机の回りをすっきりさせるということを進んで行う姿が見られるようになった。読書タイム後の本の片付けの時も、みんなを待たせることが多かったが、授業後は、「みんなが待っているよ」と声掛けすると急いで片付けて戻ってくるようになった。他にも、遅れて人を待たせそうになったり、騒いでしまって人に迷惑をかけそうになったりする場面では、「みんなが困るよ」「みんなが待ってくれているよ」などの声掛けをすると、急いだり、行動を変えようとしたりする姿を見せるようになっていく。

A児は行動に特に顕著な変容は見られないものの、A児を含めた学級全体の子供たちの行動にも変容を見ることができるようになった。周りに迷惑がかかる行動が見られた時には、「みんなが待っているよ」「みんなが困っているよ」と声掛けすると、自分の行動を見直したり、改善させたりする様子が見られるようになってきた。

また生活科でバスに乗った時には、見学に行くということで興奮しているからなのか、話し声も大きくなってしまっていた。そこで「周りのお客さんの迷惑になっているよ」と子供たちに伝えると、我慢して静かに乗ろうとする様子が見られた。

7. 3. 考察とまとめ

B児の行動の変容や、A児を含めた学級全体の子供たちの様子からも、「事象や出来事を比較しながら話し合える発問を構成」をしかけ通して取り入れたことは、道徳科の授業におけるねらいにせまることができたのではないかと考える。

A児の2つの授業の振り返りからは、「自分がよければいい」と思っていたA児が、授業を通して、「きまりを守ったり、マナーを考えて行動したりすることは、みんなが気持ちよく過ごせることにつながる」と、新たな見方・考え方を得ることができたと解釈することができる。また、B児の授業の中の発言や振り返りからは、行動の変容につながったと考えられるものを見とることはできないものの、授業の中でルールやきまりを守る必要性について新たな見方・考え方を獲得できたからこそ、自分の行動を見直していこうという思いにつながり、行動の変容につながったのではないかと考える。

また、B児をはじめとした学級の子供たちの行動の変容やA児の振り返りからも、「内容項目（C 規則の尊重）の教材とそれに関わる他教科・他領域の単元で構成する」と「振り返りの視点を設ける」についてのしかけも、「③子供たち一人一人が自分の情熱を燃やし、別々の学習経験や機会をつなげて考えるようになること」に近づく手立ての一つになったのではないかと考えている。

しかし、道徳科の目標は、行動の変容を求めることではなく、内面的資質を育てることにある。授業の中で内面的資質が育っていても、様々な道徳的価値も関連するため、行動の変容が必ずしも見られるとは限らないし、ずっと先の将来において表れるかもしれない。本実践においても、道徳科の授業が生徒エージェンシーの発揮に必ずしもつながったかは十分検証することはできていない。今後は、どのような場で、道徳科における生徒エージェンシーにつながる姿が見られるのかについて検証する方法も探していきたい。